

アメリカ版タリバンとサンフアンの聖母
プロテスタントの文脈におけるカトリックの聖母マリア信仰

ホルヘ・ドゥラン

私たちは2001年9月11の悲劇的出来事のおかげで未来を考えずにはいられない。と同時に、過去を見直すことも余儀なくされている。自殺攻撃とテロリズムに帰結するような狂信的行動というのは、これまでもしばしばくり返されてきた現象である。さしあたり、これまで別々に取り扱われ、狂気の沙汰として説明されてきたことを、互いに関連づけて分析する必要がある。ここで扱う事象は、移民の過程がもたらした変化と衝突を明らかにするものである。伝統や信仰、日々の生活習慣が、まったく異なる国民性や文化の文脈に置かれ、その中で展開された結果だ。移民というのは大挙して人々が移動する現象であるから、私たちの誰もが内に抱えている不寛容や狂信性、外国人恐怖を引き起こしてきた。

テキサス南部のサン・フアン・デ・ロス・ラゴスという街で、プロテスタント教会の牧師である一人の男は、布教がうまくいかないことに長年苦しみ続けてきた。そのあたりの住民は大部分がカトリックだというだけでなく、メキシコからの移民だった。すぐ隣りのカトリック教会は、1954年にメキシコから運ばれた聖母像を拝むためにいつも多数の信者で賑わっている。長年の不満を爆発させた男は、ついに1970年、みずからが操縦するセスナ機でそのカトリック教会めがけてつつこんだのである。

カトリック教会は燃え落ちたが、この事件は意図せざる結果をもたらした。誰もこの悲劇によって死亡した者がいなかったこと、聖母像は無事だったこと、保険によって教会を再建できたこと、聖母像の評判がいつそう高まったこと、そうした数々の「奇跡」により、この街はメキシコ人にとってあらたな「聖地」になったのである。

これらのことから我々が学びうる教訓は何だろうか。「非寛容」の結果として起こった自爆テロが、それが解釈される過程や、解釈の主体のあり方によって変わってってしまうということを考えれば、ある行為を単純に宗教や人種、国家に還元して考えていくことは恐ろしい。テロリズムには国境も人種も宗教もないのである。その意味で我々は本当に2001年9月11日の事件の意味を理解しているのだろうか。事実とともにそれが意味するメッセージを我々は考えなくてはならないのだ。